
TOILET

雲崎朝成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TOILET

【Nコード】

N9456A

【作者名】

雲崎朝成

【あらすじ】

様々な人間が利用するトイレ。そこには、人の数だけ物語がある…トイレを巡る、四人の物語。

遠藤学（前書き）

題名からして間抜けな話です。しかも扱っているものがものだけに
：お食事の方には特にご注意ください。

遠藤学

遠藤学は怒っていた。日本社会に対して、現代日本人に対して、そして、自分の置かれてある境遇に対して。

遠藤は駅の清掃員。パートだ。来月で契約も切れる。契約が更新されないならば、これからの生活は成り立たない。しかし、それでも構わない、といった投げやりな気分にもなっていた。

日曜の朝。駅のあちこちには惨状としか言いようのない光景が広がっている。特にトイレ。トイレを担当することになってから、日曜は遠藤にとって憂鬱な日になった。

今日も、その内の一つが詰まっていた。しかも、大の方。歯止めのかけ方を知らない若者のせいなのか、羽目を外したサラリーマンのせいなのか、彼にとってそんなことはもはやどうでもいい。この弛み切った日本への言いような義憤。それが心の大部分を占めていた。

（まったくよう、駅の公衆だからって何でもやっていいと思ってんじゃないだろうな。汚した奴がいれば、それを片付ける奴がいる。そんな常識も分かんねえようになっちまったんじゃ、お終いだな）そんなことをあれこれ考えながら、清掃の準備に取り掛かる。とりあえず、詰まっているトイレのドアに「故障中」の張り紙を貼っておき、いそいそと準備を始めた。

入り口には、「清掃中」の看板を出している。それでもお構いなしに、客は次々とトイレへ入ってきた。せめて、一声かけてくれれば、彼もむかつ腹を立てないで済むであろう。

（「すいません」の一言ぐらい言えやしねえのか）

そのことが、遠藤のイライラを益々助長する。

漸く乗客の一団が去り、やれやれといった感じで用具入れから姿を現す。この、まだ混雑しない時間帯の内に詰まっている方を何とかしようと考えた。

ところが、である。遠藤が準備をしている間に、故障中の張り紙をしておいた個室に人が入っている。鍵は閉まっているようであるし、人の気配も感じる。先ほど電車から降りてきた乗客と一緒に紛れて、いつの間にか入ってしまったようだ。それにしても、故障してない、空いている隣を使えばいいのに、あえて故障中の方を使用しているのはいかなものか。

このトイレはウォシュレット付きだ。駅構内の大改装に伴い、トイレも大幅に綺麗になった。新しい分、汚れがすぐ目立つため、遠藤の負担は増えた。確かに、ウォシュレット付きじゃないと落ち着かない人がいるのも事実である。そのことを考慮したって、子供でもあるまいし、トイレがどうかで故障中のトイレを使用するのは可笑しい話だ。

（この野郎、まだ酒が残ってやがんのか？）

しょうもねえと誰にも聞こえないぐらいの小声で呟きながら、扉をノックしてみる。

「すみません、こちら、故障中となっております。申し訳ないですけど、隣で…」

返事はない。もう用を足す準備に入っているとしたら、その状況で返事をするのはいささか間拔けた感じがする。返事がないのも理解できる話ではある。

しかし、現在、中では臨戦態勢という訳ではないらしい。物音一つしない。中の人物というのは用を足しているようなこともせず、じっとしているようだ。

（まさか、中で寝やがったんじゃないやねえだろうな。全く、何て言っているんだ、いいやら）

「すみません、すみません、お客さん、ちょっといいですか。隣空いてるんで、そちらでお願いします」

やはり無反応。中からの動く気配というのは全く感じられない。壁一枚しか隔てていないのに、相手の動きが読めないというのも気味が悪いものだ。

（よっぽどだな、こりゃ。いざとなったら、駅員の奴を呼ぶしかねえな。まあいい、俺は俺の仕事をやるだけだ）

便座でぶっ倒れるのも自業自得だ、そう割り切って遠藤は他の所から作業を始めた。

日曜といえど、朝は何かと忙しい。遠藤は、駅の持つ独特の雑踏をBGMに、自らの仕事に没頭した。もちろん、トイレの中の人物への注意は怠っていない。出てきたら、その顔を一度拝んでやろうと、ちらちらと目をやっていた。

小の方を一通り片付けて、もう一度、問題の個室に近づく。定期的に、何度か人の波が押し寄せたにも関わらず、中から出てくる様子は無い。

もう一度呼びかけて返事がなければ、駅員を呼んで引っ張りだしてもらおうと決心した。

（声かけるとしたらあの若造がいいな。あいつなら無駄にやる気に溢れてるから何とかやってくれんだろう）

扉の前に立った。そこで、遠藤は驚愕することになる。どうも、中から話し声が聞こえるのだ。

「おい：ことだ？：おい！：こんなに：どうするんだ！」

まさか、トイレの中で仲良くおしゃべり、ということもあるまい。常識的に考えれば、中で電話していると考えるのが妥当であろう。だが、その行為は、どう考えても常識的ではなかった。ぼそぼそ声で話しているが、電話をしているのは明白である。遠藤はあきれ返りながら、ノックする。

「すいません、お客さん！用がないなら出てきてもらえますかね！ここ、これからちょっと見なきゃいけないんで。張り紙見たでしよう？いいですか、電話するなら外でもらえませんかね！」

遠藤が強い口調で言ったにも関わらず、中の人物は電話を切ろうともしない。

「どちらにしろ：確かに、：なるが、：なるんだぞ！」

「お客さん、いい加減にしてください！出てこないと駅員を呼びま

すよ!」

「待て、待て、待て!」

「お客さん!」

「うるさいっ!」

中の人物は、遠藤に向けてそう言ったようだった。電話で話していた、慌てたような、焦ったような声とは違い、妙に語気が強い。壁越しにも、遠藤に向けられたことが分かった。

一瞬、驚きを隠せなかった遠藤ではあったが、驚きが去っていくと、怒りがこび上げてきた。

「いいですね、駅員を呼びますから。今すぐに出てきてください!」
遠藤がそう言い放つと、中の男は、急に態度を変え、懇願するように話しかけてきた。

「ま、待ってくれ、騒がしいことになる大変なことになるんだ!」
「どういうことです?」

相手は、自分の置かれた状況を心底哀れむように、大きく、はあっとため息を付くと、恐ろしい告白をした。

「今、この便座には爆弾がかけられているんだ。俺が席を立つと爆発する仕組みらしい。しかも、遠隔操作できるらしく、もし、このことが騒ぎになれば、爆発させると言うんだ。冗談で言ってるんじゃない。信じてくれ!」

にわかには信じがたい話だった。

（どうやらほんとにやばいらしい。こうなったら本格的に若造を呼びに行くか…）

そう決心し、その場を去ろうとした。その気配を察したのか、相手は必死に食い止めようする。

「待ってくれ、ほんとなんだ! 詳しく話をするから、頼むから話を聞いてくれ! 俺の話を聞いて、信じられないなら、駅員室でも、警察署でもどこに突き出してくれたっていい、どうせ死ぬんだから。頼む、話だけでも聞いてくれ!」

遠藤にも方向が正しいか、正しくないのかよくわからないものの、

相手の必死さだけは伝わってきた。

「ええっと、信じてもらうためには何をすればいい？ええっと、あ、そうだ、俺の財布をそちらに投げ込んでもいい。そいつはあんたのもんだ。な、頼む。話を聞いて、信じてくれるなら、騒ぎになることは止めて欲しい。そして、できることなら、穏便に俺を助けて欲しい」

動揺しすぎて、本人も何を言っているのか、訳が分からなくなつた様子だ。遠藤は白髪交じりの頭をぼりぼりと掻く。遠藤としては、物で人を釣るという考え方は少々気に食わなかったが、せめて話だけでも、という気になってきた。

（しょうがねえ、俺もお人よしだ。ま、イカレた野郎に付き合つてやるか）

「分かりました。話、聞きます。でも、扉の前に張り込んで話をするっていうのも変なんで、俺は掃除しながら聞きますよ。他に乗客が入って来たら知らせるんで」

こうして、遠藤とトイレに閉じ込められた人物との、壁一枚を隔てた奇妙なサスペンスが始まった。

西野昭（前書き）

ようやく前半部分終了です。

西野昭

西野昭は指示通りに、新宿行きのキップを買い、駅構内にあるトイレへと向かった。

未だに犯人の意図は分からない。それでも、息子の命がかかっているから、指示通りに動かなければならなかった。

必ず、犯人はこの駅のどこかにいて、自分のことを見ているのだ。そう思って、辺りをきよろきよろと見渡してみる。おそらく、今の西野昭ほど精神的に追い込まれている人間は駅校内にいないだろう。乗客たちは、自らの目的に従って流れるように西野の前を通り過ぎていく。

日曜の朝というのはいつもとは様子が異なっている。会社員然とした人間は鳴りをひそめ、多種多様な人間が、早朝だというのに駅の中を行き交っている。

終電を逃し、朝までどこかで時間を潰し、漸く帰宅の途に着く若者もいれば、ホストらしい、髪を染めたスーツ姿の者もいる。他には、登山に行くのだろうか、大きなリュックを背負い、ハンチング帽をかぶった者もいる。

もし、今日のような事情がなく、再び日曜の朝に駅を訪れることがあれば、ゆっくりと人間観察を行うことができるであろう。ひとまず、今、昭にとって最優先事項は、駅内のトイレに向かうことだ。そうすればいつかは、人生に余裕を感じながら人間観察を楽しむことができるかもしれない。そのいつかが、いつになるのか分からないにしても。

昨日、会社から帰ってくるなり、おそらく大多数の人間が遭遇することのない、ごく一部の人間が体験する稀な事件に昭は直面する

ことになった。

家の中に入ると、妻・美恵子が血相を変えて飛び出してきた。

「あなた、昭一が、誘拐されたの！」

取り乱している妻をなだめながら、詳しく事情を聞こうとする。

しかし、昭自身が動揺してしまっているから、何が何だか分からない。持っていた鞆をその場に放り出し、靴も投げ出すように脱ぎ捨てて、妻に駆け寄る。

「ど、どういうことだ？ 昭一が誘拐されたって？ お、落ち着いて話してくれないか。とりあえず落ち着こう、な、とりあえず」

妻の肩を支えながらリビングへと向かった。妻をまずソファに座らせ、自分も隣に座る。

「それで、一体どういうことなんだ？ 犯人から、な、何か連絡はあったのか？」

「え、ええ、一時間ぐらい前かしら。お宅の息子さんは預かった、心配するといけないからご連絡したって。もう一度、旦那が帰ってきてから電話するって。それから、警察には通報するな、もし、警察に通報すれば、子供の命はないと思え、俺はいつでも見張っているぞとも」

誘拐犯の電話としては、テレビのサスペンスドラマのようなベタなものである。それにしても、「心配するといけないから」なんて随分とナメた犯人だと昭は感じた。

「それで、警察には通報したのか？」

美恵子は今にも泣き出しそうに首を振る。

「いいえ、あなたが帰ってきてから、そのことも考えようと思って。私、もう……」

「なんで、早く伝えてくれなかったんだ！ 電話でもなんでもできたらう！ いつ、電話もかかってくるかも分からないし、こうしている間にも昭一は……」

美恵子は、はっと今頃気付いたような顔をし、俯きながら小さく「ごめんなさい」と言う。

「だって、私もう、どうしていいか訳が分からなくなってしまつて。事情が事情ですし、電話というのも」

西野は手で顔を覆った。

「もういい！今はとにかく、犯人からの電話を待とう。全部それからだ」

こうして西野夫妻は、犯人からの電話を待つことになったのだが、夫妻のやりとりを覗き見ているのか、電話は程なくしてかかってきた。夫妻は、シンクロナイズドスイミングのように、ほぼ同時に電話を見た。昭はゆっくりと電話に近づき、受話器を取った。

「もしもし、西野です」

「西野昭さんですね。お仕事お疲れ様です。今日も大変でしたか？傾きかけている会社を支えるのは大変でしょう？」

こういうとき、犯人というのは変声機を使って、ヘリウムガスを吸ったような変な声になるもんだと昭は勝手に思い込んでいたが、相手はそのようなことはしていないらしい。普通の、昭と同年代ぐらいのおじさんの声だ。しかし、その声に聞き覚えがなかった。

「そんなことはどうでもいい！息子は、昭一は大丈夫なのか？」

「ええ、無事です。今のところはね。あなた方が私の指示通りにしてくれば、何も危害は加えません。かわいいですねえ。遅く生まれとお子さんでしょう。それならなおさらかわいい。大丈夫ですよ、私は約束を守る人間ですから。だから、あなたも約束を守ってください。私はいつでもあなたを見えています。あなたに近いところでね」

確かに、昭一は、昭が四十を過ぎて生まれた子供である。陳腐な表現を用いれば、目に入れたって痛くないほどかわいい。犯人の丁寧な口調に神経を逆撫でされても、ぐっと怒りを抑えつける。

「それで、何が目的なんだ？金か？」

「お金なんていりませんよ？お金なんて要求されても困るでしょう。会社をどうにかやりくりしていくので精一杯なんだから。なあに、私の言うとおりに動いてくれればいいんですよ」

内心、息子の安否とは別に、少しほっとしたのも事実である。昭の会社は、あくどい手を全く使わなかったといえなくはないものの、これまで順調に事業を展開してきた。しかし、昨今の不況の煽りを受けてすっかり傾いていた。リストラクチュアリングによって、端的に言えば社員の賃金カットとクビ切りによってなんとかしているようなものだ。

「私はどうすればいい？」

犯人は電話口の向こうで笑っているようだ。

「まず、明日、あなたがいつも利用している駅へと向かってもらいます。T 駅と言えば分るでしょう。そこで、新宿行きのキップを買ってください。それから、改札を通って、トイレに入り、その中の一つに入ってください。目印に、「故障中」の張り紙をしておきます。その後、私から電話をしますから、以上のことを七時までには終えてください。電話に出ない、私の指示に従っていない、警察を呼ぶ等のことになれば、息子さんを即刻、殺します。いいですね。あと、携帯の電話番号を覚えておいてください。連絡用にね」

「七時まで、だな？ 私の番号は 090××××××××××だ」

「ありがとうございます。よろしいですね。難しいことは何もないでしょう。私が指示したこと、それだけです。それからのことは、電話したときに伝えます。よろしいですね」

「ああ。それで息子を返してくれるんだな」

「そうとは、言ってません。指示通りに動いてくれれば、安全は保障する、と言っただけです」

「そんな！ どうしたら、息子を返してくれるんだ！」

「とりあえず、明日です。それでは」

そう言って、電話は切れた。美恵子が心配そうに近づく。

「昭一は…」

「今のところ大丈夫らしい。犯人の指示があった。簡単なことだ。駅に行けばいいだけ。その通りにすれば、昭一は安全だ。なに、大丈夫。必ず、昭一は帰って来る。とりあえず、明日、犯人の指示に

従う。その様子を見てから警察に連絡しよう。犯人は、私達の行動を見張っているらしいんだ。もしかすると複数犯かもしれないな。とにかく明日だ。今は飯にしよう。今はあれこれ考えたって仕方がない」

美恵子は、まだ詳しく話を聞きたいような素振りを見せていたが、昭がさっさとソファ―に座り、食事の用意をするよう促したので、それ以上追求することはせず、それに従った。

このときの昭に油断がなかったと言い切れない。犯人の要求に對して、比較的簡単にそれが実行可能であったことがそうさせたのかもしれない。

とにかくその日は、犯人像についてあれこれ考えながら――心当たりがありすぎて特定することは不可能だったが――眠れない夜を過ごす羽目になった。

そろそろ犯人の指定した時間になる。時計でそれを確認し、男子トイレへと向かう。犯人が指定した時間には少々早いのであるが、駅内をあまりうろうろして挙動不審だと思われるのも嫌だったし、指定された時間より早く着いても問題はないだろうとの判断による。ちょうど電車が到着したらしく、乗客が階段を上ってくる。そうした人達に紛れるようにしてトイレへと近づいていった。

トイレの前には、「清掃中」の看板が置いてあった。にも関わらず、他の客はそれを気に留めることなく、ズカズカと中へと入って行く。昭としても気の引けるところではあったが、緊急事態だから仕方ないとして中へと入った。

トイレの中には、数人が用を足していた。犯人の指示通り、一番手前の個室に、「故障中」の張り紙がしてある。人がいる中、それに入るには勇気がいったが、ここは恥を捨て、思い切って中に入り、きっちりと鍵を閉めた。

大部分の人にとって、何をするともなく、トイレの個室にいるというのは経験のないことであろう。一般的には、さつと用を足し、さつと出るのが普通である。普通ではない環境に置かれた昭は、所在無く、立ち尽くしていた。

とりあえず、座ってみる。昭は、ズボンを履いたまま、便座に座るという行為に、言いようのない違和感を感じた。便座が座るためのものではないことを改めて実感する。そうだとしても、何をするわけでもないのに、ズボンを脱ぐというのは、さらに間抜けな気がして、そのまま着席しておく。

すると、急に外から扉をノックする音が聞こえてきた。

「すいません、こちら、故障中となっております。申し訳ないですけど、隣で…」

それに答えないでいると、再びノックされる。

「すいません、すいません、お客さん、ちょっといいですか。隣空いてるんで、そちらでお願いします」

故障中の張り紙を見た業者が訪れたのだと昭は思った。それでも外に出るわけにはいかない。ここで出てしまえば、時間通りに中へ入ることは困難になり、結果的に犯人の指示を無視することになる。昭は、できるだけじっとして、動かないように努めた。

何回かの雑踏が、トイレを訪れた。再びノックされるのではないかと思うと落ち着かなくなり、時計を何度も確認した。一秒経つのがこんなにゆっくりなものだと、昭は初めて感じた。

携帯のバイブが突然鳴り出した。慌てて携帯を取り出す。携帯の画面には非通知の文字が浮かんでいた。

「もしもし、到着しましたか？確認すればすぐ分かることですが、私としてもあまり目立ちたくないのですね。到着したものとしてお話しますよ。ところで、もう便座には座っていますか。座っていないなら、今すぐ座ってください」

「もう座っている。それで、これからどうすればいい？」

周囲に聞こえないよう、ひそひそ声で話す。今までの状況でも相

当に間抜けだったのに、中で電話をしている、という行為は異常性をさらに増す行為である。

「よろしいです。あなたはこれからそこに座り続けてください。ここで、一つ、残念なことをお伝えしなければならぬのですが…」

昭の頭に最悪の事態が浮かぶ。

「まさか、昭一を殺したんじゃないんだろうな？」

「大丈夫です。子供さんはぐっすりと眠っています。残念なことというのは、あなたの身に起きたことです」

犯人は残念そうに大きくため息をつく。

「実は、あなたの座った便器に爆弾を仕掛けました。あなたが座ったことで爆弾はいつでも起動する状態になり、席を立つと起爆します。火力としてはね、せいぜいあなた一人を吹き飛ばすぐらいですが。あ、人を呼ぶような変な気は起こさない方がいいですよ。この爆弾は傑作でしてね、破壊力を抑えた代わりに遠隔操作もできるんです。ですから、辺りが騒がしくなるようなことがあれば、私はいつでも爆発できるのです」

昭は、今、自分の身に起きている最大の不幸を瞬時に理解できないでいた。

「おい、どういうことだ？俺はどうすればいい？おい！こんなに人がいる中で爆弾が爆発したらどうなると思ってんだ！」

犯人は、喜びを抑えきれないといったようで、笑い声を上げている。

「これは復讐だよ、西野！お前が助かることになれば、子供が死に、このままだとお前が死ぬ。普通に死んでもらうのは面白くないからね。ちょっとした余興だよ。トイレの中で死ぬなんて、こんな間抜けな話だろう？俺にとっては、これ以上、面白いことはないね！どうする、西野。このままだといつか誰か気付いて、あんたを助けようとする。そうすれば、俺は爆弾を起動させる。潔く死を選ぶっていうのもあるな。けれど、もし、万が一あんたが上手くやって助かるようなことがあれば、息子が死ぬことになるぞ。さあ、どうする

？ま、よっぽどのがない限りあんたが死ぬな」

外からノックしてくる音が、先ほどよりも強く聞こえた。

「どちらにしろ誰かが犠牲になるっていうのか！確かに、爆弾が爆発すれば、あんたの復習も果たされることになるが、たくさん的人也巻き添えになるんだぞ！」

「そんなこと、ちっとも心配してないくせにな。まあ、せいぜい悩んでくれ。じゃあな」

「待て、待て、待て！」

昭の呼びかけも虚しく、電話は切れてしまった。昭は、自分ではどうすることもできないという喪失感と怒りが入り混じったような感情に包まれていた。壁からは、扉を叩く音が室内中に響いていた。

「と、まあこういう訳なんです」

清掃員とやらは、ほうとか、ふうんとか適当に相槌を打ち、他の乗客がやってくるのに気付くとこれが合図だと言わんばかりにノックしながら、昭の話を最後まで聞いていた。

「うーん、確かにとんでもねえ奴だな。駅が爆発するってのは俺も困る。巻き添えはごめんだからな。でもよ、俺、変なことに幾つか気付いたんだわ」

いつの間にか、相手はため口になっていたが、相手を不快にさせるわけにもいかず、そのことは黙認しておく。

「どういことですか？」

「俺は、ここの清掃員なんだけどよ、そんな爆弾を仕掛けてるっていうような奴は見かけなかったけどな。もし、犯人の言うとおりの爆弾が仕掛けられてもよ、ようするに便座、ウォシュレットの部分を丸ごと外して、入れ替えたってことだろ？まあ、他のところに比べれば、便座の部分が丸ごと取り外せるってことで作業は簡単だろうけどよ、相当目立つぜ。おまるを抱えてんだから」

「そうですけど。でも、ここは本当に爆弾が仕掛けられていると考えて、対策を立てた方が無難ではないでしょうか？ 狂言かどうかを確認するために、立ち上がるのはちょっとリスクが大きすぎるかと」
「まあ、確かに。でよ、話は変わるんだが、あんたは張り紙を目印にしてここに入ったんだよね？」

「そうです」

「その張り紙ってのは、俺が貼ったんだ。朝、ここに来てな。詰まっていたんだよ、ここ。そのときは、何も貼ってなかったぜ？」

昭は、その新事実に驚いた。前のめりになりすぎて、思わず便座から落ちそうになる。

「どういことですか？ 犯人は、ここが故障していることを見越して？」

「さあ、よくわかんねえけど、そんな故障してるかどうかも知れないところを指定するかね。俺が先に張り紙をしちまって、貼ってるんならもういいや、と思ったかもしれない。とんでもないことをする奴の考えてることは、よくわかんねえな」

お互い、思考の行き詰まりを見せてきたところで、ノックされた。どうやらまた乗客がやってきたらしい。その間に、昭は頭を整理しようとするが、思考の糸はこんがらがっていくばかりだ。

しばらくして、トイレは静寂を取り戻したようだ。不意に、扉から声がする。

「あんた、犯人になんか心当たりはねえのかい？」

昭が昨日から考えてきたことだったが、答えは出ていない。

「いいえ、というか、心当たりがありすぎて、分からないと言った方が正しいですね」

ふうん、という返事が返ってくる。

「私は、これまで、お世辞にも正直にやってきたとは言えません。人を裏切りもしましたし調子のいいことばかり言ってきた。先ほどの話に少し出てきたんですが、私、社長なんです。一応ね。小さい会社ですけど、一時期はなかなかだったんですよ。最近は経営が厳

しくて。自分のやってきたことに目を瞑って、一生懸命やってきたつもりだったんです。これは、当然の報いと言えるかもしれないですね」

「社長ってのも大変なんだな。俺は、しがない清掃員だけどよ、やっぱ社長になれたらって思ってたぜ。ふんぞり返ってるだけで、金がもらえるってな。だけど、あんたの話聞いて、考えが変わった。社長には社長なりの悩みってのがあるんだな」

「はは、今となっては後悔しても遅いですけどね。そう言ってもらえると少し楽になります。でもまあ、私は、殺したいほど恨まれていたってことですから、仕方ないです」

「俺は、仕方ないとは思わないけどな。ひどい目に遭ったにせよ、こんなことすんのは馬鹿げてる。まあよ、助かったら、一度そいつと話しあわねえとな、そいつと。あんたがしたことも含めてな」

「そうですね」

昭は力なく、答えた。自分が助かる見込みなどないような気がしたし、もし助かったとしても、昭一が殺されるのでは、死んだ方がましだと思っていたからだ。そうした悲壮感が、顔も知らない駅の清掃員を、世界の誰よりも信頼するようにさせたのかもしれないかった。

「こんな状況で話すことではないかもしれませんが、昭一は、私が四十二のときに生まれた子供なんです。私も妻も、もう子供はすっかり諦めていましてね、そんなときに生まれた子供なんです」

「ふうん、それじゃあ可愛くて仕方ないな」

昭は、少し照れくさそうに笑った。

「そうなんです。結婚してからずっと、男の子が欲しいって妻と話してたんですけど、なかなかこればかりは上手くいかないもんです。ほら、言うでしょ、息子とキャッチボールするのが父親の夢だって。私も、そんな夢を持つ一人だったんです。今日、本当なら息子と出かけてね、グローブを買おうと思っていたんです。それが、こんなことになって…」

「大丈夫、おめえは死なねえよ。ここを出て、息子さんも無事に助かったら、いくらでもやりやいいじゃねえか、キャッチボール。で、息子さんはいくつになったんだい？」

「五つです。今年で六歳になるんです。来年には小学校に上がります」

「可愛いさかり、だな」

扉の向こうから、ポリポリと頭を搔く音がする。今までとは打って変わって急にしおらしくなったようだ。

「どうしたんです？」

外の清掃員は、少し躊躇うようにして口を開いた。

「いやな、俺にも、息子がいたんだけどよ、五歳のとき、死んだんだわ。交通事故だね。それをちよっと思ひ出してな」

「そうなんですか？」

「息子が死んだって聞いて、カミさんはずっと泣いてばっかいたけど、俺は、怒りで自分って奴を見失っちゃってな、泣くにも泣けなかったんだよ。謝りに来た奴ってのもぶん殴ったし、周りにもあたりちらかして。とにかくひどかった。自分でもそう思う。でもな、俺には、そうすることしかできなかったんだ」

「私も、分る気がします。息子が死んだら自分もどうするか、想像もできません」

「でよ、その後、カミさんは、抜け殻みたいになっちゃって、息子の後を追うようにぽっくり逝っちゃった。俺はカミさんに何もしてやれなかった。葬式の準備ぐらいしかやってやれなかった」

「苦労、なさったんですね」

「まあ、そう言う奴もいるな。でも、そんときの俺はとにかく、世の中が憎くて仕方なかった。なんで、息子が、浩平だけが、死ななきゃなんなかったのか。なんで、俺だけがこんな辛い目に遭うのかってな」

昭には何もかける言葉がなかった。息子を失ったという不幸を背負った目の前の相手が、親身に自分のことを考えてくれていると

思うと胸が熱くなった。

「俺、思うんだわ。世の中にはどうしようもねえってことで溢れてんだから、これ以上誰かを不幸にすることなんてねえんだよ。だから、俺は絶対にその犯人は許せねえ。絶対に捕まえようぜ、なあ。おっと、人が来たらしい」

そう言ってノックの音がした。今は、この沈黙が、昭にとってはありがたかった。誰かの背負ったものを、誰かの痛みを感じる事がこれほどまでにつらいことを彼は初めて知った。

しばらくの沈黙の後。

「ところでよ、俺、ちょっとばかり気になることがあんだわ」

「何です？」

「その犯人が指定したってのはここで合っているのかね？」

「犯人は、『私がいつも利用している駅』と言いました。おそらく、私のことを詳しく知っていて、近くに住んでいる人物だと思うのですが」

「まあ、そうかしんねえけどよ、やっぱりあの張り紙が気になるんだわ。で、張り紙をしたってのは別の場所だったんじゃないかってね」

「でも、どこに…」

「で、俺は思った。『いつも利用している駅』って犯人は言ったんだろう。そしたら、もう一つあるじゃねえか。駅が。京王線の方だよ」

昭は愕然とした。この駅にはは、小田急線と京王線が連絡しているのだ。

「た、確かに。私は、いつも小田急を使っているんで、全く考えませんでした…犯人からは特に指定はありませんでしたし。私も突然

のことでそこまで頭が回りませんでした。いつものように、小田急の改札を抜けて」

「根拠ってのは俺の勘だけなんだけどよ、もしそうだとしたら相当に間抜けだぜ。お前も犯人も」

「で、でもそうだとしたら、昭一はもう殺されているんでしょか？」

昭はもうすでに名前も、顔も分からない清掃員を頼りきってしまっている。

「なんとも言えねえが、殺したんなら、連絡が来るんじゃないのかね。話だと、お前が指定された場所にいるかってどうかも確認してないんだろ？ さっき電話かかってきたときもそんなことは何も言っていなかったようだしな。それじゃあ、まだ犯人は気付いてないんじゃないのかね」

昭は黙り込んでしまった。どうすればいいか全く分からなくなっ
てしまったのだ。

「まったく、揃いも揃ってネジが抜けてやがる。もし、俺の言っていることが正しいなら、こんなとこに閉じこもってる暇はないと思うぜ。何かの事情で、犯人がこのことに気付いてないにしても、遅かれ早かれ気付かれる。そうになったらお終いだ。今なら、犯人もこの辺りをうろついているかもしれないし、さっさとここを飛び出して、なんとか飛び出すってのが良策だと思うけどな。どっちみち、俺たちは指定された場所ってのにいねえんだし」

「そ、そうですが、もし、違っていたのなら、犯人に事情を説明すれば分ってくれるんじゃないかと」

「そんな悠長なこと言ってられるかよ！ 相手は何しだすか分かんねえんだぞ。そんなこと言ったらって信じてもらえるか？ いいか、これはチャンスだぞ。おめえも助かって、息子さんも助かる。大丈夫。俺が付いてやるから。爆弾ってのが爆発すれば、俺も巻き添え食うし。おめえと俺は運命共同体だ。もともと助からない身だったんだろ。少しでも可能性があんなら、それにしがみつかねえと」

なおも、昭は悩んでいた。

「でも…」

「でもじゃねえ！子供がかわいいんだろ？そしたら親父がしつかりしねえと。そんな情けねえこと言ってたんじゃ、子供に嫌われるぜ。キャッチボールもできやしねえ」

そう言われて、漸く昭にも決心がついた。

「そうですね。もともと死んだ身ですし。息子のために、私は立ちます！周りに人はいませんか？」

「ああ、いねえよ」

「よし、じゃあ、立ちます！」

そう言って、目を瞑りながら、思いっ切り勢いよく立ち上がった。何も起こらない。昭に未だかつて体験したことのない感情がこみ上げてきて、扉を開く。目の前には、昭と同じぐらいか、それよりも年上の白髪交じりの男性が笑顔で立っていた。思わず、彼に抱きつく。

「だろ？」

昭は、何度もありがとう、を繰り返した。

「まあ、お礼は後でもらうとして、こうしちゃいられねえだろ」「はいっ！」

昭は力強く頷く。

そうやって、奇妙な友情が生まれた二人は狭苦しいトイレを飛び出し、改札も飛び越え、京王線の改札口へと向かっていった。やっていること自体は凶悪なくせに、肝心なところで間拔けた犯人を捕まえるために。

橋本博一（前書き）

犯人を捕まえるため、動き出した遠藤学と西野昭。その一方で、トイレではまた一つの物語がうまれていた、という話です。

橋本博一

橋本博一は困窮していた。未だかつてない腹痛に悩まされ。

腹痛は毎朝のことである。もともと胃腸は弱い。日本国民の中でも屈指の弱さを誇るであろう。電車の振動がそうさせるのか、乗っているうちに徐々に腸が活性化されていき、降りる頃には腹部に鈍痛を抱える羽目になる、それ故に、職場に到着してまず、トイレに行くことが彼の日課となっていた。

しかし、今日は、腹痛のレベルが違う。四駅も前からすでに痛みを感じ始め、席を立つこともままならぬ、といった状況にまで追い込まれた。脂汗が額から流れる。それを拭う力を控え、腹部の方へと全精力を費やし、漸く、目的の駅まで辿り着いた。それ以前の駅で降りられなかったのは、遅刻ギリギリの時間だったからだ。

博一はピカピカの新人社員。駅から程近い、大型のデパート内でスーツを販売している。今日はデパート内のイベントがあるということで、早朝から出勤し、準備を手伝わなければならなかった。

今は所謂、試用期間という日本伝統の制度のもと、遅刻できない身分に置かれている。更に付け加えるならば、博一はすでに腹痛で、途中の駅で降りてしまったことにより、一度遅刻している。上司にはこっぴどく叱られた。ちなみにそのときは、腹痛で遅刻しました、とも言えず、寝坊しました、とまさに目くそ鼻くそな理由を述べた。どちらを述べた方が恥ずかしくないかということ考えたとき、彼の価値判断では寝坊の方がまだいいという結果が出たからだ。

（今降りたら死んでしまうかもしれない、色んな意味で。）

そんな博一の焦燥感とは別に、電車は緩やかに速度を落とし、停車していく。

（あのとときの遅刻を、今日までとって置けば良かった。）

そんな、どうしようもないことを考えながら、今残っているありったけの力を振り絞って、電車を降りた。

他の乗客に追い越されながら、時計を見る。そして、腹痛を堪えながらゆっくりと歩いていくか、すっきりしてから走っていくか、瞬時に頭の中で計算していた。

そうした計算も、あまりの腹痛の前に吹き飛んでしまう。

（もう行くしかない！）

果てしなく続くと思われる階段を一段、一段ゆっくりと上っていった。もはや頭の中には、トイレが空いているかどうかなど、考える余地もなかった。

男子トイレの中自体は比較的空いていた。中に入るなり、急に早足になって、目的地を目指す。一番手前には故障中の張り紙がしてあった。それを諦め、さっと隣を見る。扉は閉まっっていて、鍵もかかっているようだ。

（最悪、和式でもいい！）

彼は、和式の危険性を熟知していた。目的達成の瞬間が一番危険なのだ。しかし、今はそうも言っていられない。さらに隣を見ている。

使用中！

圧倒的な絶望感が彼を襲う。八百万の神々が自分を見捨てた、そういう喪失感にも包まれる。

けれども、腹痛は、博一の気持ちとは裏腹に容赦なく襲い掛かってくる。彼は、絶望に浸る訳にもいかず、これから、革命的な作戦を立てねばならなかった。

（今から走って、急いで行くか：いや！それは危険すぎる！冷静になれ、何かあるはずだ。何か手立てが！）

もう一度、辺りを見回してみる。案外、答えは身近にあった。彼のモラルがそれを許すか、許さないか、それが問題だった。義を貫いて憤死するのか、それとも世間に非難されようとも保全を選ぶか。その逡巡も長くは続かなかった。事は一刻を争っている。彼は真

っ直ぐ、「故障中」の張り紙がしてある方へと近づき、思い切って扉を開け、中へと入った。

これから自分の身に起こる不幸も知らずに、自らの欲望のままに、彼の望まない死へと繋がる個室へ足を踏み入れた。

ひと段落して腹痛は落ち着きを見せ始めたものの、危険からは脱していない。まだ、腹部には軽い鈍痛が残っている。このわずかに感じる鈍痛がいかに危険であるかも登は知っていた。この状況で立ち上がれば、到着するまでもう一波くることは明白であった。そして、その一撃になす術もないことも明らかだった。

もう一度、時計を見てみる。もはやどう考えても間に合わない時間になっていた。

（しょうがない、今日はとことんまで付き合うか…）

そう腹を括って、腹の一物と最後まで戦い続けることを決心した。と、博一が断腸の思いで新たな決意を打ち立てたとき、外でなにやら気配がする。隣に入っていた人物はすでに出ているのだが、もっと近いところ、扉の向こうでござそそしている人影を感じた。

（変な奴だな。俺は早く出たいってのに、これじゃあ出しにくいじゃないか）

博一のナイーブな胃腸は、外の気配を敏感に感じ、急に活動を休止してしまった。外に出ることを怯え、中に閉じこもってしまったようだ。博一としては非常に困ったことになってしまった。そして、その人影はやがて、隣に入ると、ボタンと扉を閉めた。

隣からは動く全く気配がない。中でじっとしているようだった。そうした気味の悪さを感じ、ますます腹の方は動かなくなる。

（うっわ、変な奴！さっさと出たいんだけどな、こいつが言うこと聞いてくれん！）

段々、腹痛よりも焦りの方が強くなってきた。腹部に鈍痛が残る

ものの、それを我慢して立ち上がった瞬間、あろうことか隣に入った人物が話しかけてきた。

「どうだ、気分は？」

（いいわけがないだろ！やばい奴だ。早く出よう！）

そう思って、尻を拭く。ガサゴソという音ともに笑い声のようなものが聞こえたような気がした。

「いいのか？もう少し考えた方がいいと思うがね。どうせ、お前の命運は決まっているんだ。電話でもしておいた方がいいんじゃないか？お前の大事な人にね」

（うーん、まあ確かに職場には電話しといた方がいいか。でもトイレの中だしな。まあ、出てからでいいだろ）

「なあ、俺が恐いか？憎いか？楽しいなあ。お前が苦しむ姿を想像するのは。顔が見えないのが残念だよ。今すぐにでも扉をこじ開けて、その面を拝みたいものだがな」

（変態だ！変態だ！変態だ！こんな奴、ほんとにいるんだなあ。こりゃあ、早く出ないと。）

そう思って水を流した。しかし、登に、「まだだぞ！」と警鐘を鳴らすかのように腹痛がまたひどくなってきた。

（うぐ、なんでまた。今出たら確実にヤバイ。でも隣の奴もかなりヤバイ。どうすりゃいいんだ、俺は！）

「まあ、そう急ぐな。俺もお前と一緒にいつてやるから。俺はもうこの世に思い残すことはない。だから、もう少し楽しませてくれよ！」

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。）

「さあ、もっと苦しめ、苦しめ！」

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。）

「楽しいなあ、楽しいなあ！」

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。）

「ククっ、爆発するとき、お前はどんな声で叫ぶんだろうなあ」

（ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ！）

「爆発すれば、お前の体は間違いなく吹き飛ぶ」

(ん?)

「それを確認できないのは少々残念だが、吹き飛ぶ瞬間を間近で見れるんだ。そちらの方がよっぽど魅力的だ!」

(んん?)

博一は自分の置かれた状況が未だによく掴めずにいたが、自分の身に少々マズイことが起きていることは分かった。

(爆発?体が吹き飛ぶ?ということだ?)

「このことは間違いなくニュースになる。そうすれば、お前の息子を開放する手はずになっている。安心しろ」

(何っ!)

漸く、相手が恐ろしい人違いをしていることと、自分がとんでもないことに巻き込まれていることを理解した。博一は子供がいるどころか独身である。本当に勘違いで、何かを爆発でもされるならとんでもないことだ。

疑惑を抱きながら、おそろおそろ話しかけてみる。

「あのう、申し訳ないのですが、あなた、人違いをされているんじゃないでしょうか?」

確かに、今、博一が置かれている状況としては相当に阿呆な質問である。相手は突然笑い出した。

「とうとう、頭がおかしくなったか!まあそれも仕方ない、最後まで付き合ってやるよ。お前の気が狂ってもな!」

(全然分かってない、この人!おかしくなっちゃって相手の声も分かんなくなったのか。そんなこと考えてる場合じゃない、一刻も早く、間違っていることを理解してもらわないと。)

「いえ、そのう、あなたが殺そうというか、爆発させようとしている人のお名前は何と言うんですかね。僕は橋本博一という者でして、あなたとは全く関係ないと思うのですが…」

「どういうことだ?」

「とにかく、あなたは人違いをされているのかと…それで、爆発と

いうのはどういふことなんでしようか？」

隣の人物は動揺しているようだった。

「お前は西野昭じゃないのか？」

「ええ、違います」

「ちよつと待ってろ！今確認しに行くから。扉を開けろ」

「えっ、でも、今ズボンを脱いでいる状態なんですから……」

「いいから開けろ！待て、絶対に立つなよ。この爆弾は、席を立つと爆発するようになってるんだ」

「あ、はい。でも、ほんとにズボン、履いてないんです。いや、ズボンどころかパンツも」

「少しでもいいから！顔だけでも出すようにしろ！」

隣から扉の開く音がした。その音を聞き、便座に尻を付けたまま、右手を伸ばし鍵を開ける。そして、急に全開にならないよう、そのままの姿勢で戸を押さえた。

「いいか、開けるぞ」

「はい。でもちよつと待ってください」

なんとか前が隠れるように左手で押さえ、ゆっくりと右手の力を抜いた。

「誰だ、お前は！」

開いたドアの隙間からは、殺気に満ちた目が覗いていた。さらにその隙間からは、いぶかしげにこちらを見ている乗客がいる。トイレで会話しているという状況を他の乗客たちはどんな気持ちで聞いているのだろうか、そう思うと、急に恥ずかしくなってきた。その一方で、相手は信じられない、といった様子で立ち尽くしている。「だから言ったでしょう。扉、閉めてください。その、気まずいんで」

そう言つてグイッと扉を押し、鍵をかける。相手も、どうするわけでもなく、定位置に戻ったようだ。

「なんで、そこに入った。張り紙がしてあっただろう！」

「いえ、その、我慢できなくて」

「お前には常識がないのか！」

（爆弾で人を吹っ飛ばそうとした奴にそんなこと言われたくない…）

「で、僕はどうすればいいんでしょう？」

「知るかつ」

誰かを爆死させようとした犯人としては随分と無責任な発言である。博一は自分の身に起きた人生最大の不幸を呪いながら、これからどうするか考えなければならなかった。

「あのですね、僕からの提案なんですけど、いえ、もちろん却下されても構いませんよ。その、もう計画とやらは失敗したわけですし、もう辞めにしたらいかがでしょうか？」

「なにつ、どうしろって言うんだ？」

「いやあ、あなたはもうこの場を静かに立ち去るとか…」

「そうすればお前は助けを呼ぶだろう。警察沙汰になる」

「まあ、それはそうですね」

「だったら、俺は今すぐ爆弾を爆発させて、死ぬ。こいつはいつでも爆発することができるとだ。警察に追われて、ブタ箱入りになるんならそっちの方がマシだ」

博一は必死に相手をなだめようとする。

「ちよっと待ってください。ですから、この爆弾をあなたが解除して、その上で、ここから去る、そういうことです。私は誰にもこのことを話しません。それで一件落着じゃないですか？」

「せっかくの提案だがな、その爆弾を解除するには、便座の裏を剥がさないといけないんだ。だから、お前が座っている限り無理だ」

頭を掻き耑りたくなる衝動を抑えながら、何とか自分の助かる方策を思いつこうと頭を捻る。

「じゃあ、これはどうです、僕が便座を手で抑えながら立ち上がって、これ、外れますよね。そしてそのままに出ます…いや、駄目だ。こんな状態じゃあ。あっそうだ、その状態のまま、あなたが解除するというのはどうです？」

「それも駄目だな。一度起動すれば、少しの体重の変化で爆発する。」

そんな、人を殺すのに解除しやすいような爆弾を作るか？」

「あ、いや、そうですね。納得です」

方策も尽きた、耐え難い沈黙。お互い、どうすればいいのか分からない、膠着状態に陥った。その沈黙が、博一にある考えを思い浮かばせた。

「あの、僕がここにいるということはですね、本来、ここに座るべきだった人はどこにいるんですかね？」

「そういえば、そうだな」

「でしょ！とりあえず、その方に連絡を取られたらよろしいじゃないかと思いますよ。連絡先はご存知ですか？」

「ああ、知っている。確かに、そうするべきだな」

「ですから、連絡を取られてから、これからのことを考えた方がいいかと」

相手の矛先が自分から離れつつあることに、博一は少しの罪悪感とともに確かな安堵感を感じていた。

「あなたの目的は復讐なわけでしょう。復讐も果たせないのに死ぬなんておかしいんじゃないんですか。こんな爆弾まで用意して。馬鹿馬鹿しいですよ」

彼自身は気付いていないが、少々調子に乗りすぎた。相手の思考が予想外のところへ飛んでしまっていることにも気付いていなかった。

「そうだな、あっちが約束を破ったわけだから、今から仲間に連絡して子供を殺す」

博一は、相手の視線を自分からそらすという、自分の考えていたのとは異なった方向へ進んでしまったことに慌てた。さすがに人質であろう子供が、自分の発言で殺されるのは勘弁して欲しかった。

「ちょっと、ちょっと、ちょっと待ってください。そういうわけじゃないんです。ほら、もし、約束を破っていたとしても、相手にも事情があったわけですから、話を聞かないと何も始まらないと思うんですよ」

もはや、博一には相手が何を考えているのか分らなくなってきた。数年分のストレスを一気に溜め込んだような気がした。

「相手の出方次第か。よし、今から西野に電話してくる。お前はここで待っている。お前をどうするかはそれから考える」

漸く、落ち着くことができ、ため息をつくことができた。

「ええ、ここで待っています。まあ予定とは大分食い違ってしまっただけかもしれませんがね、これからですよ、あなたの復讐が成就するか否かはね」

博一が余計な一言を言い終わるや否や、再び扉の開く音がした。足音は確実に出口の方へと向かっている。やがて、その足音もしくなってきた。

一人取り残された博一は、この現状をいかに切り抜けるか、静かに考え始めた。

橋本博一（後書き）

後一人分と、簡単なエピローグ。ようやく終わりが見えてきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9456a/>

TOILET

2010年10月9日20時52分発行